

彙報

平成一六年度秋期東洋学講座講演要旨

(世界のアジア学と東洋文庫)

第四八二回 一〇月一九日(火)

岩崎文庫蔵絵巻物・嵯峨本

——源氏物語・伊勢物語を中心に——

東洋文庫研究員
成城大学教授

上野 英二

東洋文庫の創立八十周年をお祝いし、日頃の感謝の気持ちを込めて、岩崎文庫の名品のいくつかを御紹介したい。目下研究をすすめている『源氏物語』・『伊勢物語』を中心にしつつ、統一テーマ「世界のアジア学と東洋文庫」に繋がる話があれば幸いである(以下、岩崎文庫の蔵品には*を付す)。

昨年開催された東洋文庫名品展に出陳された、鳥居清長の『伊勢物語芥川』*は女を背負った男と川の流れを描いているが、『伊勢物語』のこの場面を同様の構図で描くものは、竹久夢二画の『新訳絵入伊勢物語』など少なくない。

その源流をたどると、近世初期、活字版で刊行された豪華本、嵯峨本『伊勢物語』*にその原型を見出すことができる。しかし、その構図は男女が川を渡る様子を描いたものか、川添いを歩く様子を描いたものか判断としない。物語本文にも「芥川といふ川をゐて行きければ」としか書かれていないが、内容が男が女を攫つて逃げる、駆け落ちの話であったことに注目すれば、よく似た話が『更級日記』にあったことに気付く。『更級日記』の記す竹芝寺伝説では、都から姫を攫つて東国へ逃げる男が、途中瀬田川を渡る場面が印象深く語られている。その他、日本の文学では、駆け落ち、あるいはその延長としての心中をテーマとする文学には、川を渡るモチーフを持つものが多い。川は一つの境界であり、それを渡ることは新しい世界への越境を象徴するものと意識されたからであろう。したがって『伊勢物語』芥川の段においても、男女は川を渡つたものと考えられる。これに関しては、『異本伊勢物語絵巻』を、絵巻物として繰り広げながら見る見方によって現われる図様の展開が、一つの傍証となるであろう(以上詳しくは、拙稿「渡河の情景——伊勢物語ノート——」、『成城国文学論集』二八輯)。駆け落ちや心中以外でも、日本の文学には渡河というモチーフが印象的に現れることが多いが、これは日本列島の地形や気候や文化を反映するものとして、日本文

学の興味深い特徴の一つであると指摘することができるだろう。

次に、「源氏物語」に触れる。「源氏物語」も「絵入源氏物語」*等の絵がその理解を助けてくれる。また「源氏物語」の首巻、桐壺の巻は、唐の玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を歌い上げた、白楽天の「長恨歌」を下敷にして書かれているが、「長恨歌」を理解する上でも、奈良絵本の「長恨歌」*や絵巻の類が参考になる。そうしたものとして、アイルランド、チェスタービーター図書館の「長恨歌図巻」や日本大学の「長恨歌絵巻」を調査したが、これらによく似た図様の絵巻が岩崎文庫にあったことが思い出された。

「浦島太郎絵巻」*である。この絵巻には、いわゆる竜宮城の様子が詳細に書かれているが、これは現代の子供絵本などで親しまれているものとは違い、竜宮城は「長恨歌」の絵に見られるような、中国風の宮殿として描かれている。このことは、「長恨歌」と「浦島太郎」との類似を示唆するのではない。実際、「浦島太郎」の話を書いた古い文献である「浦島子伝」や「続浦島子伝記」には、「長恨歌」を踏まえた措辞が多い。のみならず、両者の内容を比較するならば、「浦島太郎」と「長恨歌」の後半、道士が「蓬萊宮」に楊貴妃を尋ねる部分の筋立てが大むね一致することに気付く。ともに男が「海上」のユートピア「蓬萊宮」

を訪れ、美女に親しむという話である。日本で「長恨歌」が愛好された理由の一つはこういうところにあったと考えられる。

しかし、「長恨歌」の後半部分と「浦島太郎」の話とはなぜ似ているのだろうか。両者に直接的な影響関係があるとは考えにくいから、偶然の一致だろうか。ここで考えるべきは、「浦島太郎」に類似する話は、日本のみならず、中国を含めて広くアジアに、民話として分布しているということであろう。「浦島」の話はそれほど人々に愛された話であったということである。そのような話が、一方では中国で「長恨歌」という文学作品に吸い上げられ、一方では日本で「浦島太郎」の話として親しまれたということであろう。「長恨歌」は、玄宗・楊貴妃の逸事を素材とはしているが、歴史的な事実を記録したものではない。当然文学的潤色が含まれている。そこに「浦島太郎」に類似する民話が反映されたのであろう。

では、「長恨歌」の前半についてはどうか。これも類似の話で、「羽衣説話」・「白鳥処女説話」と呼ばれる一類の民話に求めることができる。水浴する女を盗み見た男は女の衣を奪い、女は一時男の妻となるが、ついには天界へ去ってしまう、という展開は、「長恨歌」の前半に重なる。「長恨歌」の「浴を賜ふ」とは水浴に当らうし、「霓裳羽衣」

とは文字通り「羽衣」だろう。この種の話も人気があったらしく、世界的な分布を見させている。「長恨歌」は、このような民話を素材として利用して作られた作品だったのでないか。そのような可能性を濃厚に示す民話として、中国の七夕説話の類（例えば「天の川の岸辺」、岩波文庫『中国民話集』）を指摘することができる。これらにおいては、話は前半が「羽衣」と、後半が「浦島」と同様の展開を見せる。しかも、その結末では、七夕の由来が語られるが、これは『長恨歌』の末尾、「七月七日」の比翼連理の契りに正確に対応するのである。

『長恨歌』は、世界的な二大民話を一つながら取り込んで名作となった。それを承けて書き起こされた『源氏物語』が、さらにそれを凌ぐ傑作となったのも故無しとしない。なぜ、「羽衣」、「浦島」の話が世界的に愛好されたのか。その二つを取り込んだ『長恨歌』を出発点としながら、『源氏物語』がどのような物語を綴ろうとしたのか、問題は尽きないが、これについては別の機会に譲りたい。

第四八三回 一〇月二六日（火）

モリソン文庫―その至宝地図―

東洋文庫研究員 海野 一 隆
大阪大学名誉教授

同じく近世の印刷地図と言っても、わが国と西洋とは事情が異なる。わが国では木版による折畳み図が一般的方式であり、これに対して西洋では銅版による地図帳仕立が主流をなしていた。これは木版が凸版であり、薄手の紙でも支障がなく、かつ和紙のもつ柔軟にして強靱という特性が貢献していた。一方、西洋の場合、書冊形式が圧倒的であったのは、銅版が凹版であり、紙にある程度の厚味と堅さが必要であったがためである。この東西における地図の体裁のちがいが今日の古本市場にまで影響を及ぼしており、わが国では当時のままの状態で売買されているのに対して、欧米ではしばしば地図帳を解体して一葉としたものが取引の対象となっている。地図帳そのままでは値段が張り、買手がつきにくいので、個人でも求め易いようにという措置である。これを助長しているものとして、額に入れて部屋を飾るといふ欧米での風習がある。こうした風習が可能なのは、地図帳の中の一葉であっただけに無闇に大きくない

という利点があるからである。広げるとかなりの大きさになるわが国の折畳み図では思いもよらぬことである。

さて、解体された結果の一葉の地図は、鑑賞用としては都合がよいであろうが、研究用としては問題がある。図に作者名や作図年の記載がある場合は別として、本来何年刊行の何という表題の地図帳に収まっていたのかを確認することが困難であるからである。従つて、同じ図であつても、地図帳の中にあるものと単独の一葉になつてゐるものとは、學術的価値に雲泥の差が生じる。

こうした観点からモリソン文庫の地図群を見た場合、注目されるのは、西洋でのシナ地図史にそれぞれ一新紀元を画した二種類の地図帳すなわちマルチャーニ (Martini, M. 衛匡国) の『新シナ図帳』 (*Novus atlas Sinensis*) およびダンヴィル (D'Anville, J.B.B.) のシナ図帳の共に版を異にする複数が存在しているということである。

マルチャーニの地図帳は、彼が一六四三年から七年間のシナ滞在中に集めた資料わけでも羅洪先の地図帳『広輿図』に基づいて編集したもので、一時帰欧中の一六五五年に刊行されている。単独の刊行物ではなくて、一六三〇年以來版を重ねていたブラウ (Blaeu, J.) 編刊の地図帳の追加版としてであつた。その年同時にラテン語・オランダ語・フランス語・ドイツ語の各版が刊行を見、一六五九年には

スペイン語版が加わつてゐる。これら各国語版のうち、モリソン旧蔵本はオランダ語版 (O-3-A-160) とスペイン語版 (O-3-A-162) とであるが、フランス語版 (O-3-A-159) にはモリソンの一九一二年一月三一日付の北京発信のミスノ (水野) 氏宛書翰が添付されていて、文面にはマルチャーニの地図帳を送るとある故、準モリソン文庫本として扱つてよいであろう。『モリソン文庫目録』 (*Catalogue of the Asiatic Library of Dr. G. E. Morrison, Part 2*) にはスペイン語版は一部しか著録されていないにもかかわらず、東洋文庫には二部所蔵されており、重複する O-3-A-161 は別の経路によつて収蔵に至つたものである。なお、マルチャーニのシナ地図帳については既発表の拙稿「東洋文庫所蔵マルチャーニ『新シナ図帳』四種」(『東洋文庫書報』一五号、一九八四年、拙著『東西地図文化交渉史研究』(二〇〇三年) 所収) に詳述があることを付け加えておく。

話題をダンヴィルのシナ図帳に移そう。ダンヴィルの一連のシナおよび関連地域の図は、最初一七三五年刊のデュ・アルド (Du Halde, J.B.) の『シナ帝国全誌』 (*Description géographique, historique, etc. de la Empire de la Chine, etc.*) の綴込み図版として世に出たものであり、図帳として刊行された最初は、一七三七年のハーゲスのスヘオレール (Scheurleer, H.) 版である。モリソン文庫にはこの版 (O-

3-A-163)のほか、一七八五年刊のバリ、ムターール (Moutard) 版 (O-3-B-101)、刊年不記のバリ、ドゥゾーシユ (Dezauche) 版 (O-3-A-164) があり、刊行を見たダンヴィルシナ図帳は全部揃ってゐる。勿論、一七三五年刊のデュ・アルド『シナ帝国全誌』(O-3-B-119) およびスヘオレル版地図帳と一組をなす一七三六年刊の記事篇 (O-3-B-96) も収まつており、更に一七三五年の初版同様多数のダンヴィル地図を収載する一七三八―四一年刊の二冊構成英訳本二部 (O-3-B-117, O-3-B-118) も加わつて、ダンヴィルシナ図に関しては、壮観の一語に尽きる。

改めて言うまでもなく、ダンヴィルのシナ図は、康熙年間(イエズス会士指導のもとに作製された洋式国土全図を翻訳したものであり、その諸図を通観すると、経緯度に基づいて分割された連接可能ないわゆる排図と省別固有地域別の分域図との二種の康熙図が利用されている。資料となつた康熙図をフランスへ送つたのは在華イエズス会士レジス (Regis, J. B. 雷考思) であり、それは一七二五年以前のことであつた。

ともかく、西洋におけるシナ地図に『広輿図』の要素を注入したマルチーニのシナ図帳、経緯度を表示する洋式の「康熙図」を導入したダンヴィルの一群のシナ関係図の共に複数の版本が一堂に会しているモリソン文庫は、ひとり

わが国の東洋学界だけでなく、世界の東洋学界にとつても、比類のない宝庫なのである。試みに海外の主要図書館について見ると、何語版なのかの情報が得られないマルチーニのシナ図帳は別にして、ダンヴィルのシナ図帳の場合はほとんどが一七三七年のスヘオレル版を所蔵するのみで、わずかにフランス国立図書館とロンドン大学オリエント・アフリカ学部とが、ほかに一七八五年のムターール版を収蔵すると言つた程度である。

第四八四回 一月二日(火)

河口慧海とチベット文献

東洋文庫研究員 吉水 千鶴 子
筑波大学講師

河口慧海(一八六六一―一九四五)は、サンスクリット語とチベット語の仏典を求めて、一九〇〇年に日本人として初めて中央チベットに到り、約二年間滞在した。さらに一九一四年再度のチベット訪問、インドやネパールでの滞在中に仏經文献のみならず、仏具、佛像、絵画などの美術品から動植物の標本にいたるまで幅広く収集、鋭い観察眼によつて自らが見聞したことを報告し、またチベット語、サ

ンスクリット語、ネパール語を学び、仏典を翻訳するなど、仏教学、チベット学、ひいては民俗学、登山、探検の分野においても多大な功績を残している。彼が収集した文献のうち、何種類かのチベット語大蔵經と藏外文献は東洋文庫に寄贈され、世界屈指のコレクションとして知られ、今日も世界中の研究者に利用されている。慧海は最晩年を東洋文庫に通い、藏和辞典の編纂に着手するなど、文庫との縁はたいへん深い。本講演は、慧海のチベット行きの歴史的背景と、東洋文庫所蔵の河口コレクシヨンの現代的意義、すなわち現在の仏教学チベット学研究への具体的な貢献に焦点をあてるものである。

河口慧海は一人でチベット行きを決意し、最初はいかなる宗派や組織の援助も受けずにそれを実行したが、彼がチベットを目指した背景には、明治になってヨーロッパから輸入された、原典に基づく仏教研究という近代仏教学の推進と、ヨーロッパ帝国主義のアジア進出にともなう日本の大陸戦略という大きな動きがある。漢訳大蔵經による經典研究では不十分だという認識のもと、日本の仏教界は、ヨーロッパの研究者に倣って、ネパールやチベットにサンスクリット語写本とチベット語の大蔵經を求めて活動を開始しようとしていた。井上円了が設立し、日本の近代仏教学の祖ともいえる南条文雄が講師を勤める哲学館で学んだ慧海

は、こうした新しい知識にもとづいて、自ら原典を求めてチベット行きを決断したのであった。同時期に浄土真宗もチベットへ能海寛、寺本婉雅を派遣したが、いずれもチベットに入国できず、慧海が最初となった。ヨーロッパにおけるインド学仏教学の発展と写本収集による原典研究を飛躍的に促進したのは、イギリス帝国のインド支配である。それは慧海をチベット行きに向かわせた仏教学の新しい動向を生み出すと同時に、一方で弱体化しつつあった中国の清朝と、その清朝に依存してきたチベットというヒマラヤの小国を脅かし始めた。日本はヨーロッパ列強と競うように、日清戦争で国威発揚し、時代の流れに乗ろうとしていた。

歴史的に深い関係にある中国と、新たに南下してきたロシア帝国、そしてインドを植民地支配するイギリスの帝国主義の利害の衝突に巻き込まれ、翻弄されていたチベットは、慧海が目指した当時、反イギリス政策をとって、外国人に対しては厳しい監視を課し、もしスパイだと疑われれば投獄、死刑の危険もあつた。ゆえに能海や寺本はチベット入りを果たせず、慧海も、ネパールから西チベットへ出るヒマラヤ山中の困難な間道を進まざるを得なかつたのである。周到な準備と類希な意志の強さ、英断によってこの困難な旅を成し遂げた慧海は、日本人であることを隠して、ラサのセラ僧院の学僧となる。一九〇二年に正体が発覚して

脱出するまでのこの時の体験を記したのが、『チベット旅行記』である。彼はその後も再度ネパール、チベットを訪れ、またたびたびパンチエンラマ六世と会い、仏典の収集を継続する。彼が請来したチベット語文献は、当時の日本ではまったく新しいもので、その功績は賞賛された。今日では、多くの文献が各地で自由に使えるようになり、インターネットを通じても入手できるようになったが、河口コレクシヨンの重要性は決して薄れてはいない。その中でもとくに彼がダライラマ一三世より拝受した、ギャンツェからもたらされた写本大蔵経は、手書きの写本であり、世界で唯一閲覧可能なギャンツェのテンパンマ系の写本として、世界の研究者の注目を集め、チベット大蔵経の歴史を解明する大きな手がかりを提供してきたのである。

チベットで大蔵経の編纂が始められたのは一四世紀初頭であるが、歴史資料に基づいて、それがナルタン寺で行われたことがわかっている。その最も古い大蔵経の経部のナルタン写本を転写して、ツェルパ写本、テンパンマ写本という二系統の写本が作られた。そこからそれぞれ東チベット系、西チベット系の写本が、校正、改訂を加えられ、現在利用されている木版印刷による(新)ナルタン版、デルゲ版、チヨーン版、北京版として出来上がっていったが、これら新しいものは校訂を重ね、翻訳語も新しいものが用

いられ、相互の違いも少なくなっている。しかしながら、もとの古いナルタン写本の姿からは遠いといわざるを得ない。それに対して、慧海請来の写本大蔵経は、書写された年代こそ一八五八―七八年と新しいが、それは古いナルタン写本からの転写であり、編纂された当時の面影を伝えるものである。実際、収録される経典や、用いられる語句には、新しい木版本と大きな違いがある。一九八二年、この写本大蔵経が、ウランバートルにあるもうひとつのテンパンマ系の写本大蔵経ときわめて似ていることが発見され、同じ元本からの転写であることが推測されている。こうして西チベットのギャンツェには、古いナルタン写本を転写したテンパンマ系の写本が伝えられていることが明らかにになり、チベット大蔵経経部の歴史的発展がかなり正確に跡付けられることとなった。また、この写本を用いることで、より古い翻訳を知ることが出来るため、個々の経典の研究には、この写本を参照することが欠かせなくなっている。慧海の時代から見れば、大きな進展をとげた仏教学であるが、彼のコレクシヨンの中にはまだ研究されていないものもたくさんあり、将来にわたってチベット学仏教学に役立つことは疑い得ないし、また役立てていかねばならないのである。

第四八五回 一月九日(火)

近代中国研究と東洋文庫

東洋文庫研究員 本庄 比佐子

東洋文庫は、一九五四年、ロックフェラー財団の援助を得て近代中国研究委員会を設置した。運営委員には和田清(東洋文庫理事)・山本達郎・市古宙三・牧野巽・村松祐次の諸氏が就き、市古宙三氏が以後長く委員会を主宰した。

日本において学問としての近代中国研究が本格的に始まったのは第二次大戦後のことであり、戦前の東洋史学界では「清末以降は歴史ではない」と言われていたという。一方、一九四九年の中華人民共和国の成立は、その歴史的背景、そこに至る中国近代の軌跡に対する研究関心を生み、日本の中国近代史研究に大きな影響を与えた。こうした状況のなかで近代中国研究委員会が発足したことには大きな意義があった。因みに、ここで「近代中国」というのは、アヘン戦争から現在までを指している。

委員会では、二〇人前後のメンバーによる研究会を毎月一、二回開催した。その状況は『近代中国研究委員会報』(一、四、一九五五―五八)に見ることができ、さらに、

研究成果を論文集『近代中国研究』(第一―七輯、一九五八―五六)として刊行するほか、佐々木正哉『鴉片戦争の研究…資料篇』(一九六四)、村松祐次『近代江南の租棧』(一九七〇)などの単行書、『経世文編総目録』(同)索引(一九五六)などの各種文献資料目録も公刊した。

一九六二年からは、新たにフォード財団・アジア財団の援助を得たことを機に、広く一般の研究者への便宜供与に力を入れることとした。すなわち、委員会発足当初より行ってきた資料収集に引き続き努めることと、それら資料を多くの人が利用できる環境をつくることである。

近代史の資料は、いわば無限に存在すると言えるのであって、それらができる限り網羅的に収集する方針を採った。基本的な資料集や研究書は言うまでもなく、新聞・雑誌、概説書、啓蒙書、旅行記などの雑書の類まで近代中国に関係のあるものは購入した。重要な資料で入手困難なもの、例えば英・米の外交文書などはマイクロ・フィルムで補った。こうして、日本文資料一万五千点、中国文資料二万九千三百点、欧文資料九千点、マイクロ・フィルム一千五十点を所蔵するに至った。その中には、「振武学校関係文書」[中華民国国民政府(汪政權)駐日大使館档案]といった原文書、戦前期の中国通ジャーナリスト波多野乾一及び横田実の旧蔵書なども含まれている。これらをモリソン文庫

など東洋文庫本体の所蔵する近代中国関係の資料と併せると、東洋文庫は近代中国関係について最も豊富な蔵書を有する機関であると言っても過言ではないであろう。

当時にあつては、多くの研究機関や大学に近代中国研究のための十分な資料がある状況ではなく、また比較的豊富に資料を所蔵している一部の機関や大学はそれら資料を公開していなかった。そこで近代中国研究委員会では、各種の工具書類を排架し、所蔵資料のカード目録を備えた参考図書室を開設した。また、日本文、中国文、欧文、それぞれの蔵書目録、新聞・雑誌の記事目録、その他各種の目録や研究動向などを掲載した『近代中国研究センター彙報』（一九七九年）『近代中国研究彙報』などを出版して、資料探索の便宜を図った。更に、近代中国研究委員会収集の図書に限り、館外貸出を行った。この制度は数年前に廃止したが、以上の便宜供与によって、近代中国を研究するのなら東洋文庫へ行くという大勢が生まれ、研究者・学生やその他多くの人々が利用する施設となった。

研究活動に話を戻すと、当初はメンバー各人がそれぞれ研究テーマをもって研究を行っていたが、一九八〇年代頃から共同研究の体制をとることになった。文部省科学研究費による『近・現代中国にかんする新聞報道の研究』『近・現代中国における日本関係出版物の研究』を経て、八八年

には戦前期中国実態調査資料研究会を発足させた。戦前・戦中期に日本の政府・民間機関が中国進出に利用すべく中国で行った調査の報告書は、批判的に利用することにより、当時の中国社会の実態解明にも役立つ資料である。その一部はすでに外国人研究者にも利用されているが、各地に散在するこれら資料の内容と資料的価値について整理することは我々日本人としてなすべき作業であると考えたからでもあった。

当初は、メンバー各人がそれぞれの問題関心に基づいた調査報告書を取りあげて検討する方法を採った。その成果は、文部省科学研究費により『戦前期中国実態調査資料の総合的研究』にまとめた。この過程で、特定の機関の調査活動にテーマをしぼることで、より研究の成果をあげ得ると考えるにいたった。そこで、一九九九年から、日中戦争期に中国占領地行政を統轄するために設置された興亜院の調査資料について総合的に研究を進め、『興亜院と戦時中国調査 付・刊行物目録』（岩波書店）に結実させた。

二〇〇三年度に東洋文庫研究部の改組が行われ、近代中国研究委員会は近代中国研究班となったが、引き続き日本の中国調査資料研究を行っている。すなわち、新たに「一九一〇年代における日本の中国認識」プロジェクトを発足させ、一九一〇～二〇年代初めの日本の山東経営について

青島守備軍の調査活動と関連させて検討している。以下に、その一端を述べておきたい。

一九一四年七月、第一次大戦が勃発し、イギリスから参戦を求められた日本は、中国関内への進出の好機とみてドイツに宣戦を布告した。山東半島に出兵した日本軍は、青島のドイツ軍を降伏させてその膠州湾租借地、及び山東鉄道敷設権と鉄道に附属する鉱山採掘権を得た。日本は同年一二月に青島守備軍を設置し、中立を宣言した中国の主権を無視して、租借地外の山東鉄道沿線地域にも駐兵して警察権・司法権を行使した。中国は終始、返還を要求し続け、一九二二年のワシントン会議における「山東懸案解決に関する条約」調印により、日本は旧ドイツ租借地を中国へ返還し軍を撤退させるに至る。山東鉄道も中国に買収されたが、鉱山事業は日本の手に残った。また青島守備軍の庇護のもとに紡績業・マッチ製造業・ビール醸造業・製粉業など多くの企業が山東に進出していたが、それら日本の経済的利益が失われることはなく、その後三〇年代へと更なる侵出を準備するものであつたらう。

青島守備軍は、この間に百数十冊にのぼる調査報告書と統計類などを作成している。その一部はドイツの残した資料の翻訳で、日本の支配確立に利用するためのものであつた。他の多くは、守備軍民政部鉄道部の「調査資料」全三

一輯をはじめとして山東各地の経済事情や物産の流通状況などの調査報告である。この時期には未だ中国人による調査がなく、それだけに守備軍の調査資料は重要であると考えられる。各地の経済・産業調査から導き出される山東農村の事情、あるいはまた、『済南嶧州間、済南開封間鉄道予定線踏査報告』に示される山東鉄道延長線問題を含む日本の経済進出との関係など、調査報告書を通して日本の山東経営の具体像とその周辺の諸問題について研究中である。

第四八六回 一月一六日(火)

世界のアジア学と東洋文庫

①東洋文庫漢籍との出会い

東洋文庫研究員 竺 沙 雅 章
京都大学名誉教授

東洋文庫所蔵の漢籍のうち、私がとくに恩恵を受けたものは、三朝本『魏書』である。三朝本とは、南宋の紹興年間に江浙で開版され、宋、元、明と修補を重ねた南北朝七史の版本のことであり、かつては蜀大字本とか眉山七史とよばれた。明代までこの版本のみ行われたので、欠損の箇所が多い。東洋文庫本『魏書』は藤田豊八旧蔵、三朝本部

分は四六卷弱で、他は嘉靖初年補刊六一卷、清代補写八卷からなる（尾崎康氏による）。その三朝本部分に紙背文書があることを、一九六七年一〇月に東急百貨店日本橋店で開かれた「東洋文庫五十周年展」にこれが出品されたことによつて知つた。当時、流動研究員として東洋文庫において研修中であつた私は、展覧会后、この文書を調査し、見える箇所を録文して、成化七年から一〇年（一四七一一—一四七四）間に、南京都督府諸衛倉および馬倉場が処置した「運糧呈文」「収糧掲帖」等であることが分かつた。その成果を年度末の東洋文庫談話会で、「東洋文庫所蔵三朝本『魏書』について」と題して発表した。

その後、さらに静嘉堂文庫所蔵の公文紙印本の宋刊『歐公本末』、宋刊『漢書』等を調査し、それらをまとめて「漢籍紙背文書の研究」（『京都大学文学部研究紀要』一四、一九七三年）を著した。この論文は、中国文献学と古文書学を用いた研究として、いささか自負してきたものである。その機縁を与えてくれた東洋文庫本『魏書』に感謝している。

当時、私は京都大学人文科学研究所付属東洋学文献センター助教であり、研修のかたわらその業務にも携つていた。この文献センターは一九六五年四月、東京大学東洋文化研究所とともに設置されたものである。その準備段階で

は、東洋文庫も候補に入つていた。むしろはじめの構想では、東は東洋文庫にとつてのことであつたらしい。ともあれ、実現を目指して、三者の連携を密にするために「東洋学文献センター連絡協議会」が設置され、その事業の一つとして、三者所蔵文献の連合目録の編纂が始められた。第一冊『日本文・中国文・朝鮮文等逐次刊行物目録』（一九六四年三月）、第二冊『中国地方誌連合目録』（一九六五年三月）

——これには内閣文庫本を含む——、第三冊『漢籍叢書所在目録』（一九六六年三月）——国会図書館、内閣文庫、静嘉堂文庫、天理図書館所蔵本を含む——。以上の三目録は、人文研と東文研とはそれぞれ資料を提出するだけで、編纂刊行の実務は東洋文庫図書部が担当した。それぞれ年度内に刊行しなければならなかつたので、図書部の労苦は大変なものであつたと思われる。文献センター設置後も連絡協議会の名は残り、第四冊として『漢籍分類目録集部（東洋文庫之部）』が一九六七年三月に刊行された。代表者辻直四郎氏の序文によると、三者で漢籍の総合的調査を行うことになり、その第一段階としてこれが編纂されたという。編纂にあつたのは、お茶の水女子大学教授倉田淳之助氏の指導を受けたとある。倉田氏は私の恩師で、永年人文研の漢籍目録編纂に当たつてきた目録学の第一人者であつた。したがつてこの集部目録の編纂法も人文研目録に準拠

している。

このような努力にもかかわらず、結局、東洋文庫には文献センターは設置されなかった。その理由は、仄聞したところでは、東洋文庫が民間機関であるからということであつたらしい。文献センターの任務である文献の収集とその公開では、東洋文庫は当時でも積極的に進んで行った。それだけに、認可されなかったことは意外であつた。

東洋文庫の漢籍目録は、その後も分冊で編纂刊行された。既に協議会の事業ではなくなつたので、表題は「東洋文庫所蔵漢籍分類目録」と変わり、一九六八年に経部、一九八六年に史部、一九九三年に子部が出版された。なお、これらに先立って、「東洋文庫漢籍叢書目録」(一九四五年、増補版一九六五年)がある。

四部のうちもつとも充実しているのは史部書である。そのなかには「地方誌三千種、族譜八百六十種、方略類三十二種、会典則例類五十種、年譜二百五十種、奏議類約三百種など」(序文)を含む。これらはいずれも中国史研究にとつて重要な史籍である。子部では、人文研目録と異なるのは、「第十四 西教類」を立てたこと、「類書類」を第十五にまわしたことである。ことに類書類には、「永楽大典」原鈔本六三巻が著録されているのは圧巻である。

東洋文庫の蔵書の特色は、榎一雄氏の次の文章に尽くさ

れている。「モリソン文庫が渡来してから六十年が経過しているといつても、東洋文庫は年若い図書館である。その蒐書に当たつての目標は貴重本・善本を主とせず、研究に必要な普通本・実用本を網羅的に揃えることであつた。これは今日でも変わつていない」(「経部」序)。今後の一層の充実発展が望まれる。

②新しいアジア学めざして

東洋文庫研究部長
早稲田大学教授

佐藤次高

1. 東洋文庫八〇年のイメージ

設立当初の「東洋学」「東洋史」は、従来の「支那学」に代わる新しい学問の概念。しかし長い年月を経る間に、東洋文庫のイメージの変化↓「香り高い古書の世界」…欧米諸語で記された重厚な革表紙の本、カンガルーの絵が描かれたモリソンの蔵書票、帙に収められた地方志・族譜の貴重な漢籍の数々。日本を含む東アジア、北アジア、中央アジア、東南アジア、南アジア、西アジアなどアジアの全域に拡大されたアジア諸語による一次史料の収集、精緻な目録・書誌解題の作成。「宋史食貨志訳註」、「満文老檔の研究」などに代表される。数十年にわたる地道な基礎研究

の積み重ね。「一九二四年の創立以後、研究叢書『Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko』『東洋学報』などの刊行によって、日本における東洋学の発展に中心的な役割を果たしてきたが、概していえば、我が道を行く、独自で地道な存在。

2. 新しいアジア学の課題

二〇〇三年四月から新しい研究体制の発足。なぜ改革が必要であったのか。旧来の五部門一二研究委員会体制は、アジア研究の全体を見渡して組織されたものではなく、しかも年月を経るうちに活動が不活発になり、休暇状態に陥る研究委員会も出てきた。改革・刷新の必要性。

新研究体制（図表参照）の構築に当たっては、まず現代アジアの現状を考慮し、それに対して柔軟に対応する必要があるとの認識で一致。アジアの現状をどうとらえるべきか、二つの重要な要素

- (1) 一九四九年の革命以後、中国の経済発展に伴う周辺諸国、および世界各地への影響力の増大
- (2) 一八世紀以後の自己革新と欧米列強の圧力による、中東でのイスラーム思想・政治の先鋭化とグローバル化

このようなアジアの新潮流を考慮して、(1) 超域アジア

ア研究部門と(2) アジア諸地域研究を組織、超域アジア研究では、現代中国研究と現代イスラーム研究を立ち上げる。現代中国研究班と現代イスラーム研究班は、一定の期間内に成果を集約するプロジェクト研究として実行し、アジア諸地域研究は、歴史文化研究を中心に、比較的長期間にわたる基礎研究として実施される。

長期の基礎研究は、いわば東洋文庫の得意とする伝統的な研究分野。これに加えて現代アジアの新動向を視野に入れた現代中国研究、現代イスラーム研究に取り組む。プロジェクト型の現代研究と基礎的な歴史文化研究の推進、この両輪から「新しいアジア研究」の萌芽が出てくる可能性に期待したい。

